

菊と長寿

菊水を飲むと不老長寿を得るという話は、中国の後漢末に応劭（おうしょう；？～204年頃）が著した「風俗通」に記されています。「南陽の酈縣（れつけん）に甘谷（かんこく）があり、谷の水が甘美（こちよくうま）かった。その山の上にたいへん多くの菊があり、水は山上より流れ下り、菊の滋液を含んでいた。谷の中に三十余りの家があり、井戸を掘ることなく、ことごとくこの水を飲み、上（かみ）は百二・三十の寿命、中程で百余り、下（しも）で七・八十の者でも、これを大夭（たいよう；とても若死に）と云った。菊華（きくのはな）が身体を軽くし、身体に気が満ち溢れていたためである」という。まあ、二百歳、三百歳という仙人が噂にのぼっていた時のことですから、そういう話がまかりとおっていたのでしょう。

西晋の傅玄（ふげん、217年 - 278年）の「菊賦」には、「菊を服す者は長寿、これを食す者は神に通ず」とあり、三国時代の魏の鍾會（しょうかい、225年 - 264年）は、「かの菊には五美がある。花のまるき、高天にかかるとなれば、天極（北極星の周囲を廻る諸星の形）のごとし、純黄まじりけなくば、后土の色（中央の帝、黄帝の色）なり。早くに植え替え寒冷に咲くは君子の徳、霜が降りても花ひらく芯のつよさ、流されようと軽々と姿を保つ。神仙の食なり」としました。神仙の食には芝（キノコ；気血を補い、五臓を滋養する）もあり、靈芝として珍重されました。

さて、かようなことは、秦の始皇帝が「不老不死の薬」を求めた話を想起させます。漢の司馬遷（BC145/135年?～87/86年）は、現実と思われることを記す史官でしたので、「延年益寿の薬」という伝承によって、始皇帝がそれを徐福に探索させたという話を記しています。徐福は見つけることかなわず、困って作り話をしたそうです。徐福は探索中に海神に出会い、「秦王は礼に薄く、観ることも手に入れることもかなわない」と云われ、なんとかならぬかと頼み込んだのでしょう。海神に従うと東南の果ての蓬萊山に至ります。芝の宮殿にまみえますと、銅色の龍の形をした神のお使いがおり、光を發し天を照らしておりました。そこで海神に何を献上すればよいかを尋ねますと、「名ある男、若い女、諸々の工人を献上されよ、ならば得られよう」と聞いた、と皇帝に申しますと、始皇帝はおおいに喜んで、元気な男女三千人、これに五穀、種々の工人を与えて行かせたのです。ところが徐福は平原と広々とした沢のある処（ところ）で王となって帰って来なかったと記しています。

神仙の話は令和の人にはありえないと首をふるものですが、その当時の人々には司馬遷のように覚めた目で見ると人もありますが、神仙をあこがれる貴人が多かったのです。始皇帝自身がそうですし、自分の墓の内に水銀を敷き詰め、再生の時を待ったようです。我々にとっては猛毒となる水銀やヒ素を食すとそれが可能になるとも信ぜられ、漢代の墓から発見された遺体からはそのような元素が検出されてもいます。その頃には錬金術、煉丹術（延年益寿の丸薬作り）が盛んとなり、呼吸法で気のみを吸って身体が軽くなり、天に昇り不老不死の仙人になるとする神仙が流行（はや）ったものです。我国の浦島太郎の話もその一環です。冗談ではなく、本気で錬金を試み、神仙の修行をしておりました。

晋の葛洪（かつこう、283年～343年）の「抱朴子」内編、「金丹」には、菊を使った長寿薬の製法が記されており、劉生丹法というもので、白菊の華の汁、楮（こうぞ）の汁、樗（おうち；HP)の汁で丹をあえて、これを三十日間蒸し、薬研（やげん；磨り潰す器具）ですりまぜて出来上がり、一年間これを

服用すれば五百年生きることが出来る。老翁が服用すれば若返る。どれくらい若返るか分からないし、少年が服用すれば老いることがない、と具体的です。これがダメでも二十種類くらいの製法が記されていますから、試みた人は多かったことでしょう。ただ丹を作るのが難しく成功し難いようです。雄黄水（赤色硫化砒素）、礬石水（ミョウバン水）、戎塩（岩塩）、鹵塩（天然の塩）、礬石（砒素を含む鉱石）、牡蠣（牡蠣の殻）、赤石脂（酸化鉄を含み、止血・止瀉剤に用いる）、滑石（マグネシウム含有炭酸塩岩や蛇紋岩中に産す）、胡粉（炭酸カルシウムを成分とする粉末；顔料）をそれぞれ数十斤、合わせて、それらを六一泥（一天生水と六地の泥）で封じ、これを焼くこと三十六日にして完成する、これを孟火で焼く、あるいは、水銀百斤と合わせて火にかければ、黄金が出来るといふ秘伝の丹なんです。

中国の漢方薬の裾野を拡大するに錬金術が大いに寄与したことでしょう。葛洪は自らの純朴を抱え続けようとその書を「抱朴子」としております。神仙や錬金と浮世離れた変人ではありますが、自身は貧窮に甘んじ、かほどに丹を作る方策を学びながら、材料をそろえ実験する資力と時がなかったようです。葉の汁にも八珍の味があり、よもぎの戸、いばらの門にも美邸の安楽ありという生活の中、道を知る士を尋ねては思索を練り、著述を残すことに時が費やされたようです。こんな風にも述べておられます。

「大体が、穀物や絹を朝廷に積み上げれば、民は貧乏して飢え凍える。百官が備われば、彼らは民が奉（たてま）った税を坐して食いつぶす。禁衛（きんえい；宮廷の護衛）の詰所には徒食の輩がごろごろし、百姓は遊んでいる人々を養わねばならぬ。民は衣食にも事欠いて、自給するだけでもひどい苦勞。かてて（まして）加えて税金、それに苦役が重なる。下々（しもじも）は命令に応じきれず、凍えたり飢えたり。法を犯して暴動するものも、ここにおいて出てくる。

王者は心を痛め、大臣は眉をひそめ、薄氷を踏む思いで、禍が身にお呼びはせぬかと心配する。智者や勇士が働いてくれぬことを恐れるが故に高い爵位と重い禄で釣る。不測の反乱を恐れるが故に、城を固め、濠を深くして備えとする。しかし、禄を厚くすれば、民はいよいよ貧しくなり、臣が驕りたかぶる。城を堅固にすれば、賦役はいよいよ重くなり、攻め方が巧みになる（抱朴子、外偏、平凡社）。」世情にも通じた人でした。

菊と重陽

重陽（ちょうよう）、九月九日といわれても何のことか分かりませんでした。陽というのは「易」で云う陰陽の陽のことで、数にあっては偶数が陰--、奇数が陽一です。一から九で九が一番大きい奇数、九月九日は九が重なりますので重陽というそうです。

「易」は、新月が満月となりまた新月となる、有極まれば減じて無に向かい、無極まれば増して有に向かうサイクルに入る、そのような循環を基本としております。その月の循環も更なる循環、四季の循環に組み込まれ、それが更なる循環に組み込まれるというような構造になっております。

ですから九月九日も過去から未来へと進む直線的な不可逆的時間の経過の一地点ではなく、一生のうちに何度も廻り来ては去る循環のなかに意識されております。また陰暦ですので、閏（うるう）で調節し年に応じて変動がありますので、陰暦九月は太陽暦では九月下旬から十一月上旬の間となります。したがってこの頃には菊が咲いていることとなります。重陽前には、菊が咲く日を心待ち、重陽にはああこの日を迎えたと心動き、これを境に衰えゆく菊への感慨が交叉いたします。

三国時代の「九日与鍾繇書」（九日と鍾繇[しょうよう；151-230年]の書）に、「年月めぐりて、たちまちにして九月九日。是の月は律中（陰暦八月）無射（陰暦九月）、群木や百草の地に伸び生えるものなく、た

だ芳菊がひとり咲き誇るのみ…」とあることからそれが知られます。

重陽のために菊華酒がつくられました。晋の葛洪は「西京雜記」で、「九月九日には茱萸(ぐみ)を提げて、蓬餌(よもぎ)を食べ、菊華酒を飲めば、長寿となる。菊華ひらけば、茎・葉を併せて摘み、黍(きび)米に混ぜて発酵させば、翌年の九月九日に熟成し、これを飲む。これを菊華酒という」と記しています。

南朝梁の呉均(ごきん、469~520年)撰の「続齊諧記」に記されているのですが、後漢の世、費長房(ひちょうぼう)という方士(ほうし、神仙術の会得者)がおり、神通力を持ち、雨を呼び、風を呼び、神を遣わし、鬼を捕らえることができたといひます。その噂を聞き桓景(かんけい)という青年が弟子入りし長く修行をしていたのですが、ある時、費長房が桓景に9月9日にお前の一家に災厄が降りかかると告げたのです。疫病神に狙われたのを察知したのでしょう。赤い袋に茱萸をいれて吊し菊花酒を持って山に登り酒をのめば助かるとのこと、桓景一家はそれに従って、その日に茱萸を入れた赤い袋を下げ、山の上で菊花酒を飲みました。日が暮れて家に戻りますと、家畜という家畜がすべて死んでおりました。一家の身代わりとなったのです。茱萸と菊花酒の香が魔除けに効果ありとされ、このときから「重九登高、效桓景之避災(重陽節に高い所に登り、桓景は災難から逃れた)」と語り継がれ、重陽節に高い山に登る風習がつづいているそうです(重陽節の由来; [香港ポスト](#))。

ただ何時からこの俗がはじまったかは、はっきりはしていないようで、南朝梁の宗懐(そうりん、498-502年)撰の「荆楚歳時記; けいそさいじき」には、「九月九日には四民が蓆(むしろ)を並べて野で飲み宴(うたげ)す。按ずるに杜公瞻(とこうせん; 随の注釈者)の云うに、九月九日の宴会がどの代に始まったかは未だ分からない。漢から宋に至る頃とされ、未だ変らず」としています。

菊はまた薬草としても用いられ、宋の陳元靚(ちんげんせい; 12世紀末13世紀初頭)の『歳時廣記』に、「千金方(医学書)では、常に九月九日に菊花を取って枕袋を作れば、枕辺によく効き、頭痛がなくなり、まなこがすっきりする」とあります。

菊と中国文人

國學院大學大学院文学研究科、韓鶴(かんこう)氏は、「中日古典漢詩における『残菊』イメージ; [HP](#)」において、「古代中国の人々は花の持つ特質を詩に表現し、己の心を託していた趣(おもむき)」があり「菊は高尚な品格を備える君子と見られ、宋の周敦頤(しゅうとんい、1017~1073年)は「菊隱逸者也」と述べ、その潔さが孤高の隱者に比せられ、別名を「隱君子」ともいうようになった。つまり、外見より、その寒風と戦って咲き続ける崇高な性格が大事にされているのである。・・・菊の「不老長寿」「高節」「隱遁」という品格を強調するあまり、植物としての特性はしだいに無視されていった」としておられます。

唐の陸贄(りくし、754年-805年)は、「文言(ぶんげん; 口語に対する文語)」において、「菊は陰陽の和氣を擅(ほしいままに)し、天地の淳精(じゅんせい、清純な精氣)を受ける。其の時を失わないこと、これは君子の守節(しゅせつ; 節操を守り利欲に節を曲げることがない)になぞらえられる。物と競うことなきは、志ある士が争そわないに同じ。道を行う者がこのようにすれば、徳をたてるに十分であり、身を立てる者がそうすれば身の程にかなう。淳和(素直で穏やか) 自守(自分の力で自分を守る)、芳潔(誉れ高く潔い)、これらが自(おの)づと身につく」とされたようです。

菊と日本人

万葉集に菊を詠ったものがないとされますが、「百代草」の歌があり、野生の菊があったとみる説もあります。生玉部足國(みむべのたるくに)のもので、「みむべ(壬生部)」ですから、大王の皇子(みこ)・皇女(ひめみこ)の養育のために置かれた部(べ)、乳部(みぶべ)の人です。「父母が、殿(との;家)の後方(しりへ)の、ももよ草、百代(ももよ)いでませ、我(わ)が来(きた)るまで」とあり、父母と離れて壬生部で働いていたのでしょうか、父母の家の裏に咲いている「ももよ草」のように長く元気でおられますように、私が帰るまで、と気遣っております。

これが中国で品種改良され、日本に戻ってきたという説もあるようです。また、遣唐使によって中国の菊が持ち帰られたとする説もあるとのこと。

四書五経を学ぶ「大学」の大学頭を務めた山部王(桓武天皇;在位 781~806 年)が宮中の宴で酩酊して、菊を詠った歌が「類聚国史(平安時代の史書)」にあります。「このころの しぐれの雨に 菊の花 散りぞしぬべき あたらその香を」とあり、漢籍に通じ学識ある方でしたので、中国文人風に菊の香を惜しむ風情と政治風刺とをからめたような趣があります。平城天皇(在位 806~809)の時に重陽に宴会を催すことが始まったとされます。これは宴会であって節会ではない、「易」や「道教神仙」の風を取り入れたものではないとあります。

日本人はそういった中国文人風とは異なり、上記の韓鶴氏は、「そもそも単純さと物事の天然自然を好む古代の日本人は、菊そのものに関心をもって、咲き匂い、そしてうつろっていく菊の花が純粹に美的な自然鑑賞として享受される」と評しておられます。

凡河内躬恒(おうしこうちのみつね)の歌に、「白菊の花をよめる」とし、「心あてに折らばや折らむ初霜のおきまどはせる白菊の花(古今 277)」があります。初霜が降りて葉の上に輝く霜の白さが白菊のようで、どれが白菊かわからない、心のむくままに手折ってみようかという心情のようです。これは紀貫之の「いづれをか花とはわかむ長月の有明の月にまがふ白菊」に触発されたものとされており、「紛らわしい見立て」の発想によるものとあります。長月は陰暦九月、菊月、晩秋月ともされますので、ひんやりした月光のなか、どれもが白菊のように、あるいはどれもが白菊でないような、とまどいの風情を詠んだのでしょうかね。

日本人は仏教的な「諸行無常」、禅の「無心(松のことは松に習え)」、あるいは「もののあはれ」の感覚があり、それを短・長歌や俳句にする伝統があり、中国人の菊のとらえかたとは異なるとみられるようです。重陽が五節句(1月7日、3月3日、5月5日、7月7日、9月9日)の一つとされたのは江戸幕府の開設以降のこととされており、幕府が儒学を奨励したことで重陽が仲間入りしたのかもしれませんが。また江戸では朝顔にしても然り、品種を改良しその技を競うことまことに盛んであり、菊人形を考案したり、人々の目を驚かせることにかけてはすざまじい努力が傾注されてきました。

五節句は明治6(1873)年に制度上では廃止となり、重陽は令和の人には縁の薄いものとなっております。

菊溪菊は、その「ふるさと」を失って久しいとのこと。清水のくだる野に、あらたな故郷をえることができれば、こころおきなく咲くことができるでしょうし、他処に住むことになろうと、里帰りをこころまちにすることもできましょう。

了 2023年5月29日

門外漢が記しており、原文が確かかも不知、解釈もこれでよいのか不明。参照した文は以下のとおり。

「藝文類聚」卷第八十一。

「風俗通曰、南陽酈縣有甘谷、谷水甘美、云其山上大有菊、水從山上流下、得其滋液。谷中有三十餘家、不復穿井、悉飲此水。上壽百二三十、中百餘、下七八十者、名之大天、菊華輕身益氣故也」

西晋の傅玄 「菊賦」

「服之者長壽、食之者通神」

三国時代の鍾會「菊花賦」

「夫菊有五美焉。圓花高懸、準天極也。純黃不雜、后土色也。早植晚登、君子德也。冒霜吐穎、象勁直也。流中輕體、神仙食也。」

司馬遷「[淮南衡山列伝](#)」『史記』 卷百十八。

又使徐福入海求神異物、還為偽辭曰：『臣見海中大神、言曰：「汝西皇之使邪？」臣答曰：「然。」「汝何求？」曰：「願請延年益壽藥。」神曰：「汝秦王之禮薄、得觀而不得取。」即從臣東南至蓬萊山、見芝成宮闕、有使者銅色而龍形、光上照天。於是臣再拜問曰：「宜何資以獻？」海神曰：「以令名男子若振女與百工之事、即得之矣。』秦皇帝大說、遣振男女三千人、資之五穀種種百工而行。徐福得平原廣澤、止王不來。

晋の葛洪 「抱朴子」内編、金丹

「又劉生丹法、用白菊花汁地楮汁樗汁和丹蒸之、三十日、研合服之、一年、得五百歲、老翁服更少不可識、少年服亦不老。」

「当先作玄黄、用雄黄水、矾石水、戎盐、鹵盐、礬石、牡蛎、赤石脂、滑石、胡粉各数十斤、以为六一泥、火之三十六日成、服七之日仙。又以玄膏丸此丹、置猛火上、须臾成黄金。又以二百四十铢合水银百斤火之、亦成黄金。」

「九日与鍾繇書」

「歳往月来、忽逢 九月九日。是月律中無射、言群木百草無有射地而生、惟芳菊紛然獨榮。…」

晋の葛洪 「西京雜記」

「…九月九日佩茱萸。食蓬餌。飲菊華酒。令人長壽。菊華舒時、并採莖葉、雜黍米釀之、至来年九月九日始熟、就飲焉。故謂之菊華酒。…」

晋の葛洪 「抱朴子 外偏 詰鮑」

夫谷帛積則民有飢寒之儉、百官備則坐靡供奉之費、宿衛有徒食之衆、百姓養游手之人、民乏衣食、自給已劇、況加賦斂、重以苦役、下不堪命、且凍且飢、冒法斯濫、於是乎在。王者憂勞於上、臺鼎輦戚頁於下、臨深履薄、懼禍之及。恐智勇之不用、故厚爵重祿以誘之；恐奸讒之不虞、故嚴城深池以備之。而不知祿厚則民匱而臣驕、城嚴則役重而攻巧

南朝梁吳均撰 「續齊諧記」 九日登高

「汝南桓景隨費長房遊學累年，長房謂曰：『九月九日，汝家中當有災。宜急去，令家人各作絳囊，盛茱萸，以繫臂，登高飲菊花酒，此禍可除。』景如言，齊家登山。夕還，見鷄犬牛羊一時暴死。長房聞之曰：『此可代也。』今世人九日登高飲酒，婦人帶茱萸囊，蓋始於此。」

南朝梁宗懷撰、隋杜公瞻注『荆楚歲時記』

「九月 九日四民並藉野飲宴。按杜公瞻云九月九日宴會未知起於何代。然自漢至宋未改。…」

宋の陳元靚『歲時廣記』卷三十四

「千金方常以九月九日取菊花作枕袋、枕頭、大能 去頭風、明眼目」

唐の陸贄 『文言』

「菊擅陰陽之和氣、受天地之淳精。不失其時、比之君子之守節；無競于物、同志士之不爭。行道者象之足以建德、立身者取之足以作程。淳和 自守、芳潔自持」。

万葉集第二十卷：4326 生玉部足國

父母我 等能々志利弊乃 母々余具佐 母々与伊弓麻勢 和我伎多流麻弓

類聚国史 - 七五・曲宴・延暦一六年（797）

桓武天皇延暦十六年十月癸亥、曲宴、酒酣、皇帝歌日、己乃己呂乃、志具礼乃阿米爾、菊乃波奈、知利曾之奴倍岐、阿多羅蘇乃香乎（このころの しぐれのあめに 菊のはな ちりぞしぬべき あたらその香を）」

10月癸亥(12日か)

寛平御時菊合(寛平三年〈891〉ふゆ)、延喜十三年内裏菊合(913年10月13日)、醍醐御時菊合(延喜二十二年〈922〉あきすぎて)、天曆七年内裏菊合(953年10月28日)、上東門院菊合(長元五年〈1032〉10月18日)、元永元年内大臣家歌合・「残菊」(1118年10月1日)とあり、重陽の行事とは時期も内実も異なる。菊合は、人数を左右にわけ、互いに歌を付けて菊花を出し、花輪の美、作柄などを品評して優劣を争う催し。

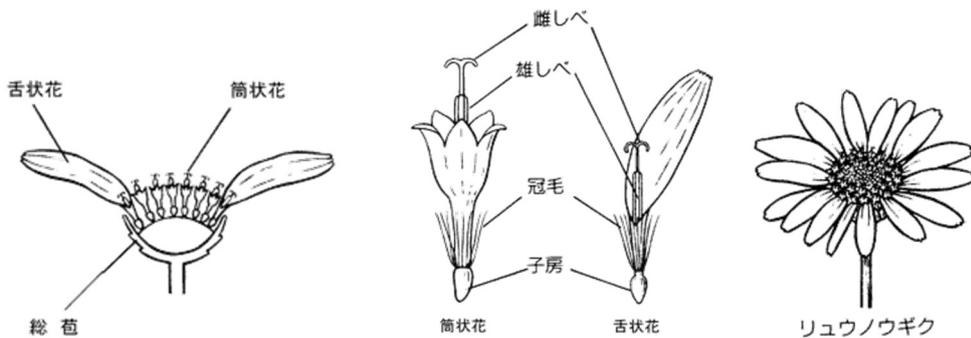
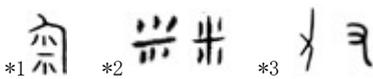
以上

2023.05.29

菊について

菊は艸と菊からなり、艸は草のことで菊がその内容を示すこととなります。菊は金文では*1 とあり、勺と米との組み合わせです。勺は腰を曲げた人を横からみた形です。手に米を持ち上げる形であり、米は甲骨文では*2 であり「もみ」のついた稲穂を連想させますが、細かいもの、小さな花びらの集合体のようなものを含むようです。そういうものを摘み取って「うけひ」を行ったとされます。「うけひ」は願かけで、四つ葉のクローバーが摘めれば幸運、願いが叶うみたいなものですが、古代においては、神意に叶うかを問う敬虔さがありました。残念ながら野菊でどういう「うけひ」をしたのかは分かりません。

甲骨文や金文の時代には野生の菊しかなかったようで、5～6世紀頃に野菊と小紅菊の交配から品種改良が始まったとされます。菊は花びらのように見える舌状花と中央の筒のようになった筒状花の集合体の一つの花にみえた草花ですから、野菊の原初の姿はシンプルなものであったとみられます。



[葉草・野草のページ](#)

勺を*3 手とみて手で包み込むとし、綿や糸くずを包んで革（レザー）の袋にまとめるとマリ、鞠（蹴鞠のマリ）となります。オと組み合わせると掬（すくう）となりますが、両手で水を「すくう」ようなことです。中国の春秋時代に南の野蛮とされる楚と北の平原（中華）の晋が戦をし、楚兵は敗れ逃れて河を渡ろうとしましたが、舟が足りません。舟べりに沢山の兵がしがみつき、舟は進まず転覆しそうになり、それらの兵の指を切り落としたそうです。「舟中の指、掬すべし」と「春秋左氏伝」に記されており、両手で「すくえる」ほどの指があったそうです。両手で「すくう」掬は美しいものばかりではなかったようです。

陶淵明

さて菊となりますと、唐の陶淵明（365～427年）の「飲酒」がよく取り上げられるようです。
結廬在人境 而無車馬喧 問君何能爾 心遠地自偏 采菊東籬下 悠然見南山 山氣日夕佳 飛鳥相與還
此中有真意 欲弁已忘言「廬（いおり）を結んで人境（じんきょう）に在り 而も車馬の喧（かまびす）しき無し 君に問う何ぞ能（よ）く爾（しか）るやと 心遠ければ地自ら偏（へん）なり 菊を東籬（とうり）の下に採り 悠然として南山見（あらは）る 山氣（さんき）日夕（にっせき）に佳（よ）く 飛鳥（ひちょう）相與（とも）に還（かへ）る 此の

中に真意有り 弁ぜんと欲すれば已に言を忘る」ということですが、情報過多の令和の日々にあっては、専門家でもなければ何をいっておられるか、めんどくさくなり、パスとなることでしょう。

陶淵明さんは山中に隠遁するでなく、市中に暮らしておられますが、馬車が通り人々が往来するうるさい巷(ちまた)ではなく、静かな処(ところ)に住んでおられたようです。心頭滅却すれば火もまた涼し、と禅にあります。心を彼方にとばせばこの地も彼方の野のごとし。家の東の垣根の下で菊を摘む。ふと見上げると、なんと、かの南山が見(あらわ)れました。夕暮れて鳥が連れ立って巢に還りゆくではありませんか。伴侶と野で菊を摘み帰る、これこそが真(まこと)(地位や富や名誉など夢幻)。飛鳥の相与(とも)をみると、もうことばは無用。とでもなりませうか。

お酒も入っており禅の境地のみではないようです。菊の香にも誘われて、南山の彼方まで心が飛来していったようです。菊の力のおそろしや、神仙の媚薬にも負けぬ。1960年代後半からLSDでシュール(超現実的、不条理、奇抜、難解)な、サイケデリック(幻覚、陶酔)な音楽を奏したミュージシャン達が想起されます。

「露と落ち 露と消えにし我が身かな 浪速のことは 夢のまた夢」が辞世の句とされた天下人がありました。これこそが現実とばかりに身を粉にして戦い取ったものが夢のまた夢というのですから、人にとっての真(まこと)の現実が何であるかは実に定めがたいものです。John Lennonが曰く、「I don't believe in the Beatles! I just believe in me, Yoko and me. That's the reality. The dream is over. I was the walrus*, but now I'm John.」というのも同じような気持ちでしょう。されば、陶淵明さんは菊を摘んで夢から覚められたといえるかもしれません。

* I Am The Walrus – [The Beatles](https://moon3756.blogspot.com/2022/10/the-beatles-i-am-walrus.html) (https://moon3756.blogspot.com/2022/10/the-beatles-i-am-walrus.html)

2023.06.09

李白

唐の李白(701~762年)は、「重陽の節句」(9月9日)に「九日龍山飲」(九日龍山に飲む)を詠んでいます。寂しいものです。

「九日龍山飲 黄花笑逐臣 醉看風落帽 舞愛月留人; 九日、龍山に飲む 黄花、逐臣を笑ふ 酔ひて見る、風の帽を落とすを 舞ひて愛す、月の人を留むるを)」ですが、酒乱の人ようです。杜甫が李白を、酒屋で眠り、酒を一斗飲んで詩百篇を詠むような人といいます。天子のお召しがあれど、酔いどれ仙人なりと素知らぬ風体、ついに長安から放逐され、逐臣となります。

「李白一斗 詩百篇、長安市上 酒家に眠る。天子呼び来たれども 船に上らず、自ら称す 臣は是れ酒中の仙と (飲中八仙歌)」黄花というのは菊花のこと、逐臣とは李白その人のことです。

重陽の節句に龍山に登って酒を飲む、飲むと詩が口をつく。酒杯に黄花を浮かべて飲めば、黄花に笑われているようで、酔えば風が帽子を吹き飛ばした。中国では冠、帽は貴人、役人の位を示すもの、無帽は地位のない者、黒髪のままは地位も姓もない黔首(けんしゅ; 黒髪頭)、黔黎(けんれい; 黒々)といい見下されました。黄花(中央の宮廷人)にも風(世間)にもあざ笑われている気分。立ち上がってふらふら舞えば笑ふ黄花も吹き飛ばす風も愛おしい。月だけかな、私をそのまま受け入れてくれるのは・・・とでもなりませうか。次の日に

「昨日登高罷 今朝更举觴 菊花何太苦 遭此兩重陽；昨日登高罷（や）み、今朝更に觴（さかずき）を挙ぐ、菊花何ぞ太だ苦しき、此の兩重陽に遭（あ）ふは」としています。

昨日龍山に登って飲んだが、今朝も杯に菊花を浮かべた。菊花よ、お前さんには又今朝も昨日のことを思い出させてあいすまぬ、という気分ですかね。酒がもとで亡くなるのですが、臨路（臨終）の歌に、こうあります。

「大鵬飛兮振八裔 中天摧兮力不濟 余風激兮万世 遊扶桑兮挂石袂 後人得之伝此 仲尼亡乎誰為出涕；大鵬（たいほう）飛びて八裔（はちえい）に振（ふる）ひ 中天（ちゅうてん）に摧（くだ）け力（りき）不（な）く 余風（よふう）は万世（ばんせい）に激（し） 扶桑（ふそう）に遊（あそ）びて石袂（せきそで）を挂（か）く 後人（こうじん）之（これ）を得て此（これ）を伝（つた）う 仲尼（ちゅうじ）亡（な）びたるかな 誰か為（な）に涕（なみだ）を出（い）ださん」

「莊子」の大鵬ですが、魚の巨大なものが鳥に化けたもので、翼が三千里あり、大風が来て飛び上がると九万里の高さに達します。まあ、台風のような鳥です。ところが李白は途中で力尽きたといます。扶桑というのは東方の果て、太陽が昇る処（ところ）ですが、そこに立ち寄ったとき石に翼をひっかけたのです。李白も石につまづいて力をそがれてしまったのです。戦国時代の大鵬の話は唐の私にまで伝わっている。私の詩はどうだろう。仲尼とは孔子のことです。孔先生がご存命であれば私の為に一掬の泪、いや、一粒の涙もあろうが・・・

大丈夫です、杯に浮かんだ菊も、帽をとばした風もそうでしょうが、令和の世の庶民の私にさえも貴方のことは聞こえております。

杜甫

唐の杜甫（712～770年）は、社会の不条理に対するやりきれなさを、そこはかたなく詩にされるようです。宰相の房琯（ぼうかん）の罷免を弁護し、肅宗帝の怒りに触れたのですが、宰相の張鎰が、「甫がもし処罰されるようなことがあれば、以後諫言をなすものの道を絶つことになるであります」ととりなしたことで、華州（陝西省）の地方官への左遷でおさまったようです。戦乱の続く中で食にも窮すること多々あり、人々の暮らしの苦しさに目をむけておられたようです。「秋興」という詩があります。

「玉露凋傷楓樹林 巫山巫峽氣蕭森 江間波浪兼天湧 塞上風雲接地陰 叢菊兩開他日淚 孤舟一繫故園心 寒衣處處催刀尺 白帝城高急暮砧；玉露凋傷（ちょうしょう）す 楓樹（ふうじゆ）の林 巫山巫峽（ふざんふきょう） 氣（き） 蕭森（しょうしん） 江間（かうかん）の波浪（なみだ）は 天（あま）を兼ねて湧（も）ぎ 塞上（さいじょう）の風雲（ふううん）は 地（ち）に接して陰（くもり）る 叢菊（そうぎく；群生する菊）兩（ふた）たび開（ひら）く 他日（たにち）の淚（なみだ） 孤舟（こしゆ）一（ひと）たび繫（つな）ぐ 故園（こゑん）の心（こゝろ） 寒衣（かんい）處處（じょじょ）催（もよほ）す 白帝城（はくていじやう）は高（たか）うして 暮砧（ぼちん）急（いそ）なり」

白帝城は長江の三峡（雄大な瞿塘峽、秀麗な巫峽、険峻な西陵峽）を見下ろす地です。秋になり冷たい露が降り木の葉はしおれ、あたりはしんしんとした気に包まれます。沸き立ち流れる水煙りは天に向かい、山城からは風とともに雲が流れ下ります。薄暗いなか花開く野菊、ああ、あの時も咲いていた。ぽつんと繫がれた舟、あれを漕げば故郷に帰れるのだろうか・・・あちこちで冬服のこしらえがはじまる時、超然とたたずむ白帝城の下では、夕暮れに急いで洗濯物を貼り付けた板を叩く音が響く。といったところでしょうか。

白帝城は超然とそびえるも、政権を廻る諸々の気の錯綜する処(ところ)。野菊は恐らく白いのでしよう。ひんやりとした薄暮の気のなかに、生気を発しています。あの時も、そして今も、世の中暗くとも、来年も、その先も花開く。人の営みの続くかぎり、心の菊も花開きその想いは伝わる。とでも思っておられたのではないでしようかね。

2023. 06. 10

越後さんの応援歌に如何

Breathles The Corrs [You Tube](https://www.youtube.com/watch?v=vzerbXfwGCE) <https://www.youtube.com/watch?v=vzerbXfwGCE>

息が出来ないほど愛されたいようです。

晋の葛洪 「抱朴子 外偏 詰鮑」追加

2023. 08. 02

